

オープンガーデンが地域社会に与える影響

—流山市江戸川台，通行量調査から—

林 香織*・岩井 さくら**・島田 凜***・伏島 麻衣****

要 約

本研究は、オープンガーデンを地域イベントと位置付け、「ながれやまオープンガーデン」を事例に、地域イベントの開催が、地域住民に与える影響を交流人口の増大という観点から数値化し、視覚的に地域住民に還元することを目的とするものである。交流人口の増大を示すデータ収集として通行量調査を用い、平常時とイベント時の交通量の比較から、地域で開催されるイベントに集客力があることを、地域住民に示したい。

調査の結果、普段は閑静な住宅街である江戸川台西エリアに「ながれやまオープンガーデン」を開催すると、交流人口は最大6.5倍も増大していることがわかった。徒歩の来訪者の増加が顕著で、自転車・自動車の通行量は平常時とほとんど変わらないことから、オープンガーデンの来訪者は徒歩がメインであることもわかった。ただ、オープンガーデンの来訪者は高齢者に偏りがあることから、もっと別の世代に来訪してもらう機会を模索したり、居住空間へのよそ者の立ち入りなど、地域への影響としてネガティブな要因を今後の研究課題としたい。

キーワード：交流人口，地域イベント

はじめに

2005年11月、秋のオープンガーデンとして始まった「ながれやまオープンガーデン」は、2023年5月で16回の開催を数える。この3年間は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止を余儀なくされたものの、本年5月14日(日)～16日(月)の3日間にわたり、19か所の個人宅の庭が公開された。

これまで江戸川大学社会学部、土屋薫教授を中心とした研究チームは、2007年頃から、流山市を主なフィールドとし、レジャー、観光、メディ

アコミュニケーション、コミュニティの観点からオープンガーデンに関する研究を重ねてきた。近年は、オーナーの高齢化によるオープンガーデンの継続性に関わる諸問題について、オーナー、運営者の関係性からの検討を重ねてきた。その一つとして、オープンガーデンの運営者の多くは、趣味緑の拡大深化を望む一方、オープンガーデンの開催を通じて、地元が花や緑にあふれた環境になることを達成目標にする人も多く、オープンガーデンは趣味の延長線上としてだけでなく、地域社会にコミットするための一つの手段である可能性を見出した(林ら, 2022)。運営者にとっての地域社会とは、近所付き合いから地域貢献まで幅広く捉えることができるが、レベルはどうであれ、地域に関わりをもって生活をする事の重要性を認識していると考えられる。

一方で、オープンガーデンを地域の中で行われるイベントとして位置づけた研究は、造園学の分野でいくつかみられるものの、地域への影響や効

2023年11月30日受付

* 江戸川大学 マス・コミュニケーション学科教授
コミュニケーション学 メディアコミュニケーション論

** 江戸川大学 マス・コミュニケーション学科3年生

*** 江戸川大学 マス・コミュニケーション学科3年生

**** 江戸川大学 マス・コミュニケーション学科3年生

果に言及したものはまだ少ない。また、地域住民にその影響を視覚的・感覚的に示すことは難しい。本研究の着眼点は、地域住民に視覚化できる情報として、交流人口の増大という形で提示できるデータを収集できないかという点にある。そもそも交流人口とは、JTB総合研究所によると「その地域を訪れる人々のこと。その地域に住んでいる人（定住人口又は居住人口）に対する概念である。」⁽¹⁾とされている。近年、観光学やまちづくりの分野では、「関係人口」と区別する意味で、用いられる傾向があり、地域との関わりがなく、地域を訪れる目的も重視されることはない。「ながれやまオープンガーデン」を目的とし、このイベントに参加した人々は、交流人口ととらえることができる。来場者調査は、イベントに来た、もしくは参加した人のみを計測する方法だが、交流人口がどれくらい増加したのかを示すことはできない。

そこで本研究では、交流人口の増大を示すデータ収集として通行量調査を用い、平常時とイベント時の交通量の比較から、地域で開催されるイベントに集客力があることを地域住民に視覚的に還元することを目的とする。

1. 研究背景と先行研究の整理

地域で行われるイベントが地域住民にどのような影響を与えるかについての研究は、地域ブランディングや観光といった文脈からの考察が多い。そのなかで、地域における多世代が交流するイベントを中心にコミュニティ意識や参加者の地域に対するイメージに関する調査を行った大西は、地域住民のコミュニティ意識として、「地域への愛着は総じて高い」が、「地域とのつながりや団結については、6割程度の肯定感しかなく、むしろ地域とのつながりの薄さが示された」という（大西, 2014）。また、多世代交流イベントの参加者は、「私が住むまちは、歴史・伝統がある」や「私が住むまちは、花や緑などの自然が豊かである」といった、居住地域の文化的・自然的要素を肯定的に評価することを見出した（大西, 2015）。

また、地域活性化を目的とした地域イベント（商店街を中心としたマーケットの開催）の来場者へのアンケート調査から、来場者にとってそこは「情報収集の場」として機能しており、イベントに出店した店舗側には、「情報を提供する場」となっていることが李らによって明らかにされている（李ら, 2020）。同じように、店舗の出店を伴う地域イベント（亀山御坊楽市楽座）の来場者調査から、前川らは「コミュニティの活性化に寄与するため」に、「地域住民に地域資源の魅力を伝えることで、地域住民が地域の良さを再確認し、地域に愛着をもってもらうこと」が重要であると指摘している（前川ら, 2005）。

この「地域の良さを再確認し、地域に愛着を持つ」ことを地域イベントとの関連から明らかにしたのが多田で、地域イベントを、「地方自治体が主催する地域を土台とした公共性を有するイベント」と定義したうえで、その本質は、「地域内に存在する独自の地域資源を再評価し、地域住民の知識をそれらの地域資源と融合させる主体形成を実現すること」にあるとしている（多田, 2022）。つまり、商品価値のあるものを開発し、地域を経済的に活性化させるだけでなく、地域資源の再発見することが重要という概念と捉えることができる。例えば「ながれやまオープンガーデン」は、宅地造成の結果失われつつあった緑を個人宅のガーデニングによって取り戻していくと企画された「ガーデニングコンテスト（2005年、流山市主催）」の応募者によって結成された「ガーデニングクラブ花恋人（かれんと）」によって運営されている。流山市では、2005年のつくばエクスプレスの開業を契機とした、「都心から一番近い森の街」、「母になるなら流山」などの戦略的シティセールスによって、人口増加率が高い。令和4年度内の人口増加数は7年連続で日本1位⁽²⁾となっている。流山おおたかの森駅周辺が目覚ましい開発の影で、おおたかの森の由来となり、かつてオオタカの飛来地であった「市野谷の森」は、都市開発において、かつては50haほどあった森が25haに半減し、その影響で、鳥類の数も減少傾向であることが確認されて

いる（齊藤ら,2014）。開発以前から住む地域住民は、このような変化を目の当たりにしていることになる。「都心から一番近い森の街」というまちのイメージを表すキャッチコピーは、都市化に伴い減少していく緑を、保全・創生し、豊かな住環境をイメージさせる。市では「流山グリーンチェーン戦略」,「まちなか森づくりプロジェクト」などの緑化施策³⁾によって、このイメージを守ろうとしている。ながれやまオープンガーデンは、個人庭の緑化と整備が、まちの住環境を維持しようとする文脈でとらえることのできるイベントであり、地域住民が、まちの魅力を再発見する良い機会を提供していると考えられる。

一方、オープンガーデンを来訪者の立場からみた場合、ただ庭を見るだけでなく、公開されている庭までの道のりや街の雰囲気などを味わう、街歩きとしての側面に着目することができる。兼井らは、「まちあるきイベント」の参加者に対する調査から、イベントがもたらす効果を「まちへの評価」,「イベントの評価」として分析している（兼井ら, 2011）。その結果、まちへの評価と関連性の高い因子として「風情性」,「歓待性」,「田園性」が確認され、まちへの評価と見どころの質、季節や天気と満足度の間で関連性が見出されている。このイベントは、長野県松代市における武家屋敷跡の庭巡りや路地散策であり、この結果は先の大西が指摘した「居住地域の文化的・自然的要素を肯定的に評価する」点と合致している。オープンガーデンの来訪者は、庭から庭へと移動する際に、居住環境としての流山市を意識することになる。これが、地元住民にとっては、魅力の再発見であり、市外からの来訪者にとっては、流山市の良さを意識する機会と考えることができる。しかし、それらは個人の感覚的な問題で、視覚的に示すことは非常に難しい。

こうした先行研究と、研究背景から、今回は、通行量を計測する手法を用いて、交流人口の増大を計測するための調査を実施した。

2. 調査概要

先行研究を踏まえ、調査場所を江戸川台西2丁目交差点付近と選定し、通行量調査を実施した。

2.1 調査方法

a. 調査時期：（イベント開催日）

2023.5.14 9:00~17:00

（平常時）

2023.5.21 9:00~17:00

なお、イベント開催前の2023.5.7にも計測を予定していたが、前日から、交通機関の乱れを伴うような荒天予報が大々的に報道され、当日も土砂降りであったことから、調査を断念した。

b. 調査方法：断面交通量調査

計測は、歩行者・自転車・自動車（トラックやバス、タクシーは計測不可）とし、オープンガーデン公開庭を接続する道路の通行量を2方向から計測することとした。

c. 調査場所：調査地点 A 江戸川台西2丁目交差点

①江戸川台駅からK庭に向かう道路の通行量（左から右）

②K庭からT庭に向かう道路の通行量（右から左）

調査地点 B ロッシュ江戸川台前

①北部中学校側からT庭に向かう道路の通行量（左から右）

②T庭から江戸川台駅に向かう道路の通行量（右から左）

d. その他：本調査は江戸川大学社会学部現代社会学科の崎本志志ゼミナール、土屋薫ゼミナールとの合同調査とし2日間のべ25名の学生が調査に参加した。

2023年の流山オープンガーデンで最も公開件数の多いエリアが「江戸川台西」の6庭で、次に多いのが「江戸川台東エリア」の4庭となっており、いずれも東武アーバンパークラインの「江戸川台駅」を最寄り駅としている。2018年に、江戸川台西・東の2庭における訪問者数をカウンタ

ーで計測したところ、図1のようになっていた。江戸川台駅西口から徒歩5分程度のK庭と、江戸川台駅東口から徒歩15分程度のK庭では、11:00~11:30の時間帯に、訪問者数の差が最も大きくなっていった（西のK庭が東のK庭の12.11倍）。これを参考に、今回の調査では計測場所を

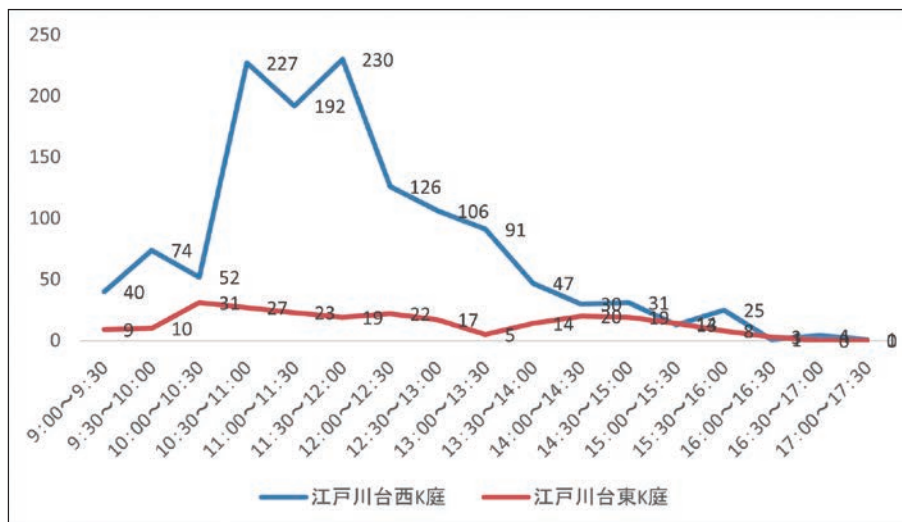


図1 2018年来訪者数調査結果（人数）



図2 調査地点（筆者加工）
(C) OpenStreetMap contributors

江戸川台西に絞ることとした。

その中でも、特に公開年数も長く、テレビや雑誌に取りあげられることが多いK庭、T庭を中心に、M庭を含めた3庭と、駅を結ぶ導線を想定した。また地調査地点AとBは、東武アーバンパークラインと並行に走る道路で、運河から流山おたかの森方面へ抜けられる道として、交通量も多い。徒歩だけでなく自転車や自家用車での訪問者の計測にも有意義と考え、選定した。調査個所の詳細は、図2に示した。

3. 調査結果

図3～6に示したのが、地点AとBの、5月21日（平常時）と、5月14日（イベント時）の交通量を、各時間帯で積み上げたグラフである。

地点AとBの5月21日（平常時）を比較すると、通行量の内訳が大きく異なり、地点Aは歩行者の割合・自転車の割合が多いのに対し、地点B自動車メインであることがわかる。また、通

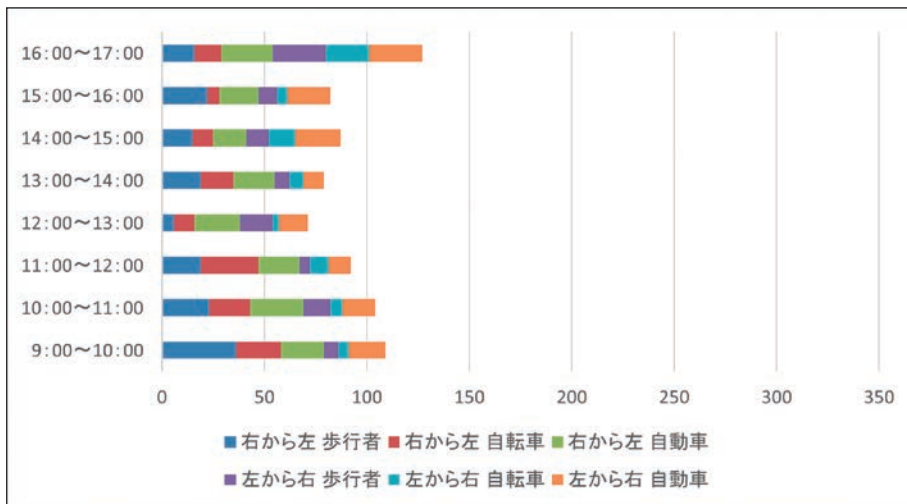


図3 地点A 5月21日（平常時）

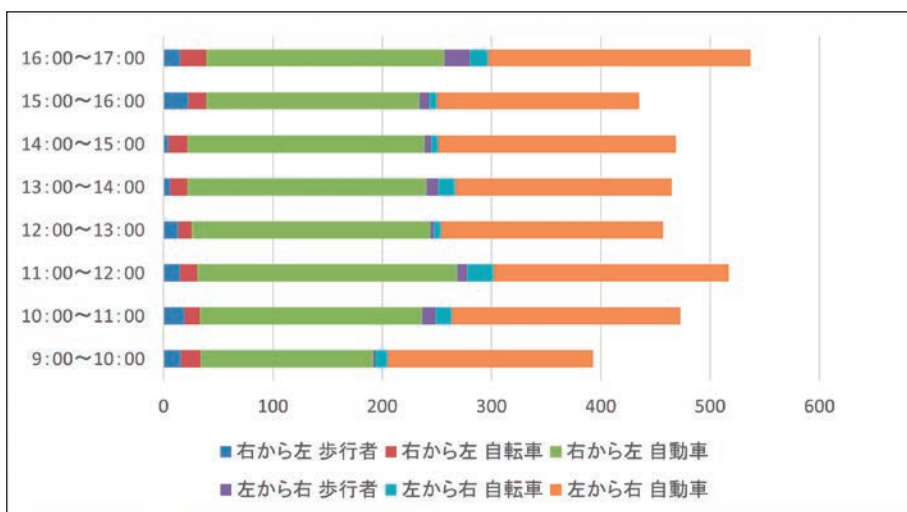


図4 地点B 5月21日（平常時）

オープンガーデンが地域社会に与える影響

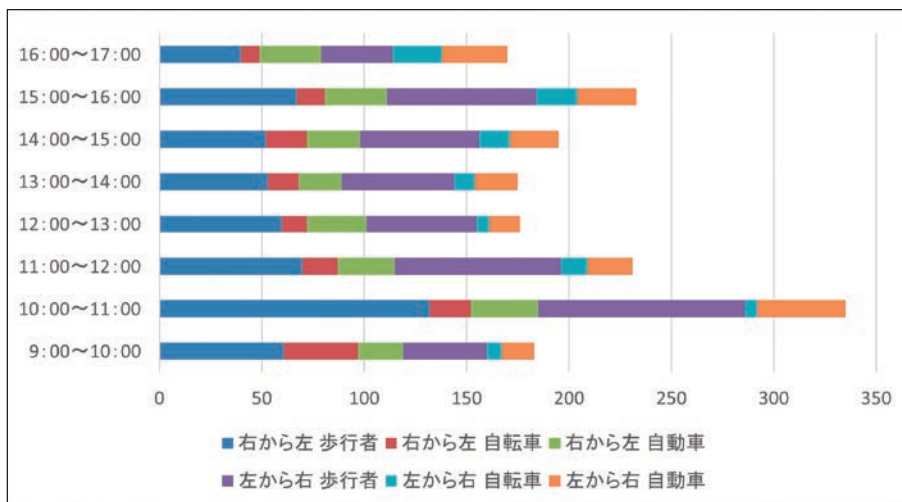


図5 地点A 5月14日(イベント時)

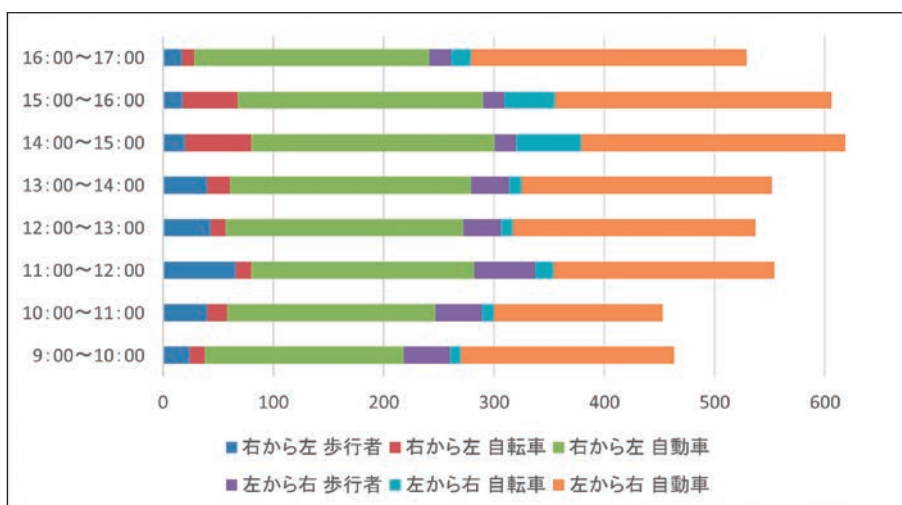


図6 地点B 5月14日(イベント時)

行量が増える時間帯も、16:00~17:00に最も交通量が増える点は共通しているものの、地点Bはどの時間帯も300~400程度の往来があるのに対し、地点Aは9:00~10:00以降減少に転じ、12:00~13:00に最も少なくなり、その後増加に転じるなど、交通量に若干ムラが見られる。そして、地点Bに比べると、全般的な交通量が少ない。

次に、地点AとBの5月14日(イベント時)

を比較していく。

平常時と同じように、地点Aは歩行者・自転車の割合が多く、地点Bは自動車の割合が高いという、大まかな傾向は平常時と変わっていない。

次に時間帯で見ていくと、地点Aで最も交通量が多いのが10:00~11:00で300を超えている。そこをピークにお昼に向けて、交通量が少なくなるが、全体として150~200の交通量を記録している。地点Bでは、一日平均して400~600

オープンガーデンが地域社会に与える影響

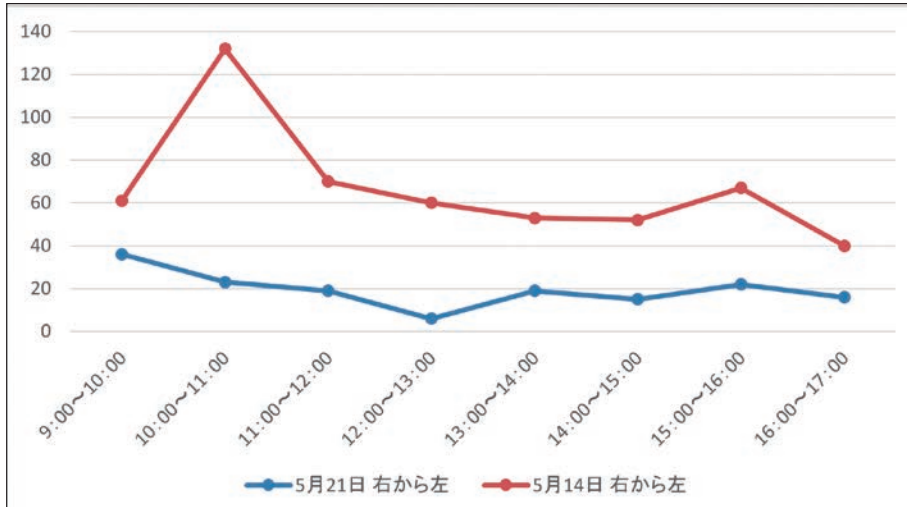


図7 地点 A (右から左) の歩行者数比較

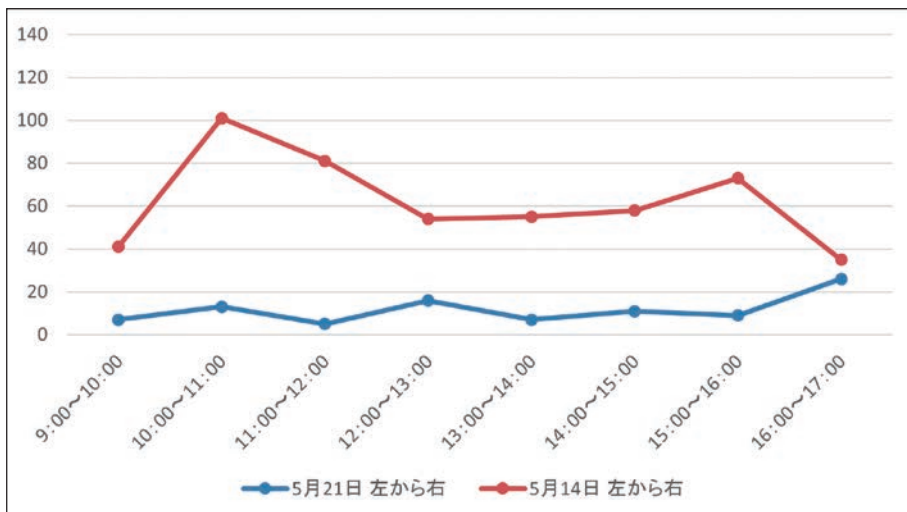


図8 地点 A (左から右) の歩行者数比較

程度の交通量を記録しており、最も交通量が多い時間帯は、14:00~15:00となっていた。同じ曜日を比較しているため、ピークの時間帯が変化していることは、イベントの影響があったとみるべきである。そこで、地点 A と地点 B で、最も変化が激しかった歩行者についてのデータを比較してみることにする。

図7~8は地点 A における歩行者数の変化を示したものである。特に顕著な違いがみられるの

は、地点 A (右から左) の10:00~11:00の時間帯で、平常時の6.5倍の歩行者が観測されている。K庭からT庭へ向かうことが想定されており、やはりこの導線の交通量が増えているのは、オープンガーデン開催の影響と考えて間違いはない。参考程度ではあるものの、前述した2018年のデータでも、10:00からの時間帯で庭への来訪者が増加していることと一致している。「ながれやまオープンガーデン」江戸川台西地域の見学

オープンガーデンが地域社会に与える影響

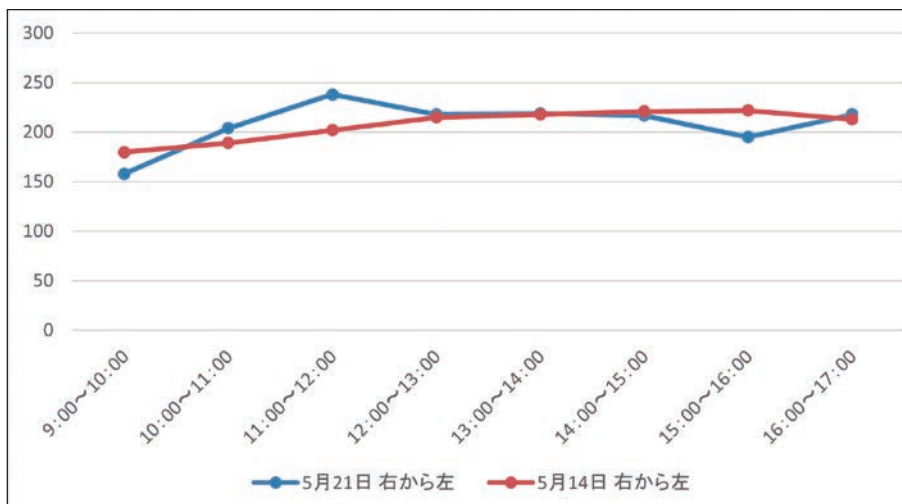


図9 地点B (右から左) の自動車数比較

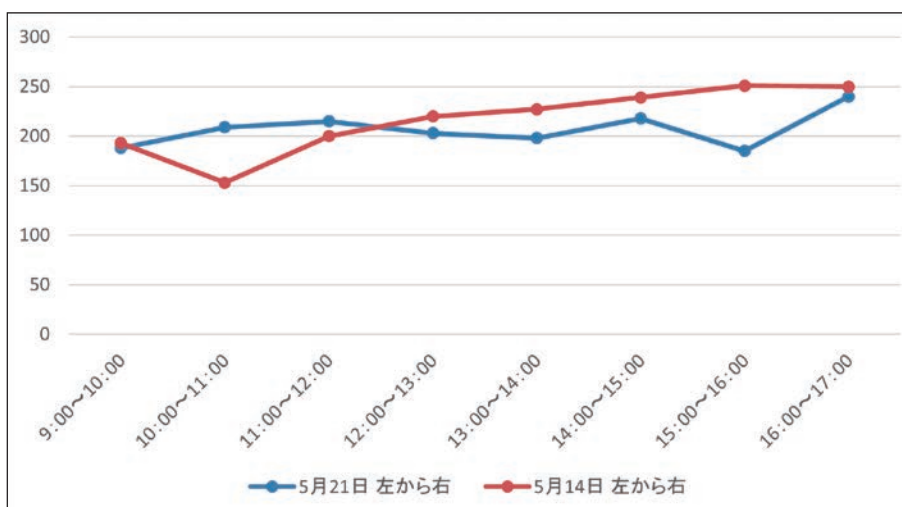


図10 地点B (左から右) の自動車数比較

ピーク時間帯は、10:00~11:00ということが出来る。全体を通して、右から左への歩行者数は、平常時の2~3倍程度を観測しており、見た目にも「いつもより人が多いな」という印象を持たれたのか、調査時に学生達が「今日は人が多いけれど、何かイベントでもあるのですか?」と声を掛けられることもあった。左から右、つまりK庭からM庭、駅への方面への歩行者数も平常時に比べ、2~3倍程度になっている。右から左への歩行者数が激増していることを考えると緩やか

な変化に見えるが、普段は居住者の通行がほとんどの道路に、3倍の人手を観測すると、多くの人何かを求めてやってきていることを意識できるだろう。なお、イベント当日の14日、16:00から雨が降り始めたことにより、見学者が急に減り始めた。歩行者量が急に減ったのは、時間的なものだけではなく、雨の影響が考えられるため、オープンガーデンの人手は天候に左右されることが示唆される。

次に地点Bにおいて最も多い通行手段が自動車

であることから、イベント開催時と平常時の自動車通行数の比較をしたものが図9～10となる。時間帯によってばらつきはみられるものの、両日の総計はほぼ変わらず、イベント開催の影響はほとんどないとみられる。このことから、オープンガーデンに自動車の交通量はほぼ関係がないことがわかり、もっと言えば、オープンガーデンを見ることを目的としている人達は、徒歩移動がメインということがわかった。

同じように自転車でも比較してみたが、イベント開催時に微増しているものの、歩行者ほど交通量が増えたとは言えず、オープンガーデン開催の影響は少ないと言える。よって、オープンガーデンの来訪者はそのほとんどが、歩行者で、自転車や自動車を交通手段とする人は少ないと言える。

また、14日のイベント開催時、それぞれの時間帯に起きた出来事、往來した人の特徴や感想など、調査に関わった学生達がメモを残した。それをテキストマイニングし、ワードクラウドで表示したものが下記図11である。

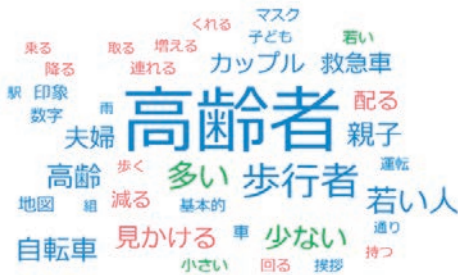


図11 調査時メモによるテキストマイニング⁽⁴⁾

学生のメモで最も多く書かれたのが「高齢者」であり、「歩行者」「高齢」「夫婦」「親子」などのキーワードとの関連性が強い。「カップル」「若い人」といったキーワードは、「高齢者」の前後に頻出されており、「高齢者は多いが、若い人は少ない」といった形で記入されていた。オープンガーデンの来訪者は、高齢者、高齢の夫婦が多く見られる。イベントの継続性を考えれば、もっと若い人の参加を呼び掛けたいところだが、今回の調査では、来場者は高齢者に偏っていることが読み

取れた。

まとめと今後の展望

今回行った通行量調査の結果をまとめると以下のようになる。

1. 地点Aは歩行者、地点Bは自動車がメインの通行者であり、イベントを開催しても、その傾向は変わらないことから、通行量の増加＝交流人口の増大は、地域イベントの影響と考えることができる。
2. オープンガーデンを開催したことで、通常の2～3倍、最大で6.5倍も歩行者が増加していた。一方、自転車は微増、自動車はほとんど変わらないことから、オープンガーデンの来訪者は、徒歩で参加していることがわかった。
3. オープンガーデン来訪者は高齢者に偏りが見られる。

調査を実施した流山市江戸川台西エリアは、「昭和30年代に東武野田線の『江戸川台駅』の開業と合わせ、駅を中心とした宅地開発事業により整備された規制市街地」である⁽⁵⁾。いわゆる閑静な住宅街であるが、「ながれやまオープンガーデン」は、このエリアの交流人口を6.5倍も増大させる地域イベントであることがわかった。ただ、オープンガーデンの来訪者は高齢者に偏りがあることから、今後はもっと別の世代へのアプローチが必要であることも課題として見出せる。

しかし、観光地ではない住宅地に、これだけの交流人口を生み出すイベントが成立していることは地域の住民としても地域の魅力の再発見につながると思える。実際、これらのデータを、流山市民を対象とした生涯学習「流山ゆうゆう大学」の講義内容として紹介したところ、「庭いじりやガーデニングという趣味が、これほど人を呼ぶイベントにつながるの意外だった。」「見るところのない場所ではない、というは驚きだった。」などのコメントを頂いた。今後は、本研究成果を研究論文としてだけでなく、市民への話題提供と

して、積極的に発信していきたい。一方で、これだけの交流人口の増大がもたらす負の影響についても検討しなくてはならないだろう。今回の調査では自動車の通行量はそれほど平常時と変わらないものだったが、それでもやはり車で来訪され、路上駐車禁止のエリアに駐車する、オープンされていないお宅の前に駐車するなどの迷惑行為も散見される。また、普段居住していない、いわゆるよそ者が居住エリアに入ってくることをよしとしない地域住民もいるだろう。それらのネガティブな要因をいかに減らすかについての検討を、今後の検討課題としたい。

参考文献

- 大西良, 2014, 地域住民のコミュニティ意識に関する一考察－多世代交流イベント「みいステ」に参加した地域住民を対象に－, 比較文化研究 (48), 25-30
- 大西良・池田博章, 2015, 地域交流イベント「みいステ3」に参加した地域住民および大学生の地域に対するイメージ調査の結果について, 比較文化研究 (49), 39-50
- 兼井聖太・佐々木邦博・上原三知, 2011, 長野市松代町におけるまち歩きイベントと地域の評価との関連性, ランドスケープ研究 74 (5), 689-692
- 斉藤裕・高橋祐太郎・吉田正人, 2014, 流山市における都市化による鳥類相の変化, 千葉県生物多様性センター報告 7, 52-64
- 多田憲一郎, 2022, 地域発展戦略としての地域イベントの意義－地域イベントの長期的効果－, 都市とガバナンス」vol.38, 48-53
- 前川裕司・有元純, 2005, 地域コミュニティの活性化に寄与するイベント運営の在り方に関する研究－亀山御坊楽市楽座を事例として－, ヒューマンケア実践研究支援事業研究成果報告書, 39-50
- 林香織・土屋薫・崎本武志, 2022, オープンガーデン主催者の意識が運営に与える影響－主催者への意識調査結果から－, 江戸川大学紀要, 32, 223-235,
- 李良姫・黄晶禧ら, 2020, 地域イベント開催の効果と課題－太子町マーケットを事例に－, 兵庫大学論集 (25), 33-39

謝辞

本研究の遂行にあたり、調査計画の立案実施につきご尽力下さった、江戸川大学社会学部現代社会学科土屋薫教授、崎本武志教授に深謝致します。また同ゼミナールに所属する学生達に調査実施に協力頂きましたこと、感謝いたします。最後に、調査実施にご協力くださいました、「ながれやまオープンガーデン」実施主体であるガーデニングクラブ・花恋人の皆様にご感謝の意を表します。

付記

本稿は「コミュニティ政策学会第22回学会大会（於東京都市大学）でのポスターセッションで一部発表済である。

《注》

- (1) JTB 総合研究所 観光用語集「交流人口」
<https://www.tourism.jp/tourism-database/glossary/exchange-population>
(2023.11.19)
- (2) 流山市役所 公式ウェブサイト 「流山市の常住人口」
<https://www.city.nagareyama.chiba.jp/information/1008422/1008423/1008457.html> (2023.11.19)
- (3) 流山市役所 公式ウェブサイト 「ようこそ流山市のホームページへ」
<https://www.city.nagareyama.chiba.jp/appeal/1003866.html>
(2023.11.21)
- (4) ユーザーローカル AI テキストマイニングによる分析結果
<https://textmining.userlocal.jp/> (2023.11.21)
- (5) 流山市 都市再生整備計画 江戸川台西地区（平成25年3月）資料より引用
https://www.city.nagareyama.chiba.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/007/402/edogawadainishi.pdf
(2023.11.19)